

転機 展望

私の経営論



建設業から転身、耕作放棄地を薬草園に
吉澤 克美さん(滋賀県東近江市)

滋賀県東近江市の農業生産法人(有)永源寺マルベリーは、中山間地域の耕作放棄地を薬草園にのみがえらせ、それを原料にした健康食品事業を展開する。建設業から参入した代表取締役の吉澤克美さん(76)は、モリンガなど本州での栽培が難しい希少な作物にも挑戦。地域雇用を生み出し、農地を守る吉澤代表に経営理念や課題を聞いた。

必要な堆肥運びや手作業で除草に従事している。

経営メモ 役員2人と社員4人、パート・アルバイト16人。約13畝で桑、アシタバ、モリンガ、ケール、ヨモギ、ツキミソウ(オオマツヨイグサ)などを栽培する。自社商品は、インターネット販売や道の駅、スーパーなど120の委託店舗に並ぶ。

地主はそっぽ：孤軍奮闘 こつこつ広げ原料15トン 若手参入が励み 輸出視野

桑の栽培は自前の約50坪から始めた。地元の旧永源寺町を含む5市町の合併がきっかけだ。特産の「政所茶」は規模が小さい。地域おこしで、桑の栽培を大学教授から提言された。養蚕ではなく、桑の葉が糖尿病予防に役立つ植物として研究されていた。

桑の栽培は自前の約50坪から始めた。地元の旧永源寺町を含む5市町の合併がきっかけだ。特産の「政所茶」は規模が小さい。地域おこしで、桑の栽培を大学教授から提言された。養蚕ではなく、桑の葉が糖尿病予防に役立つ植物として研究されていた。

ものを作ろうと最終的に行き着いたのが健康食品だ。農業参入の難しさがありました。12畝ある集落の農地は8割を借りて、健康食品の原料を栽培する畑に転換した。当初は、桑を植える提案をしても地主たちに乗ってもらえなかった。「畑の『は』の字も知らぬのに、そんなことできるんか」と。荒れた茶畑は5年間の国の整備事業で茶樹を植え直したが、また荒れていった。そんな状況に、やっつと奮い立った。

階でうまくいかなかった。取引先がつぶれて結局売れず、仕事にならぬ。営業は畑をしながら自分で回らなさいいけない。そんな状態を5年ほど続けるうちに、徐々に売れるようになってきた。桑の粉末は500kg、旧永源寺町内に120筆、その他で20筆ほどを管理している。

整備するのは全て耕作放棄地。ここ数年は、毎年1畝ほどずつ広げている。畑は2坪の所もあれば、30坪もある。開墾は1人でやるので年1畝が精いっぱいだ。旧永源寺町内に120筆、その他で20筆ほどを管理している。

17年に有機JAS認証を取得し、徐々に栽培を広げている。将来の人口減少で国内市場が先細るだろうと、有機健康食品の需要のある海外に目を向けている。輸出対応を日本貿易振興機構(JETRO)の指導で進めているところだ。地域の高齢者には健康的なものを作りながら、元気で長生きして働いてもらいたいと思うてやっている。とはいえず、若い力も必要。人手確保や作業指示、農福連携の難しさなど課題は多いし、きれいにした農地を守っていくのは大変なことだ。

だが明るい見通しもある。30代の商品開発・営業を担う人が入り、卸売や輸出対応、商談会に動いてくれている。20代も来て、他にも新しい人が集まりつつある。体制が整うまで、もう10年は頑張らなければとの覚悟で現場に立っている。